冒険者の心得その1生きるべし！

三歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冒険者の心得その１生きるべし！

【Ｎコード】
Ｎ６０６６Ｘ

【作者名】
三歩

【あらすじ】
ケインとラルゴ、神様から”アビリティ”と呼ばれる特殊な力を授かったことで、冒険者として生きていく道をえらんだ２人の少年達の友情物語。
悩みながらも前を向き、自分の限界を決めてしまわないで、突き進む少年を描いた冒険活劇を目指します。
初投稿です。１話ごと短めに書いてく予定です。常にハッピーエンドを目指します。

ケインがキライだった日（1）

新しい年を祝う祭りで、村の広場は賑わいをみせている。あちらこちらで大人達も子供達も楽しそうにしているのが・・・ケインにはなんとなく面白くなかった。ケインはその日が嫌いだった。

この世界”アートフィル”では神々や精霊が新年を祝うこの日に特別な”何か”をプレゼントしてくれる、と言われている。誰に何をくれるかはよく判らないらしい。しかし、何かを授けてくれるのは決して嘘ではない。この村にも1人授かった者がいるのだから。その人は小柄な女性だが、村一番の力持ちだ。

「よう、ケイン。お前は食わないのか？」

後ろから声がかかった。振り向くと自分と同い年のラルゴが焼き鳥の串を数本持って近づいて来た。一本をケインに差し出す。

「サンキュー、ラル。」

串にむしゃぶりつく、村特性のタレがなかなかだ。ラルゴは亜麻色の髪をしている。甘いマスクと人懐っこい性格で同年代の女子からおばちゃん達にまで人気がある。ケインは黒に近い灰色の髪で顔は悪くない方だと思っているが、女子にはさっぱり縁がない。ラルゴ曰く、”目じから”がハンパでないとのこと。ようするに目つきが悪いということなのだろう。

「今年こそ、”アビリティ”貰えるかな？15歳で貰えるとすんごいらしいからな～、俺たちスペシャルイヤーだよな、今年は。」

”アビリティ”とは神々などから授かる力の通称である。そしてラルゴが言ったことこそがケインがこの日を嫌っている原因であった。

ケインかキライだった日（2）

「神様もラルになら今年はくれるかもな。」
出来るだけ、出来るだけ感心が無い風を装い返事を返す。しかし、付き合いの長いラルゴには無駄のようで少し意地悪な、それでいて人懐っこい笑みを浮かべて、
「強くなりたいんじゃ無かったのかい？」
さらりと、直球ど真ん中ストレートに聞いて来た。
そう、ケインは強くなりたかった。だが、それを神頼みにして安易に手に入れることを願う自分を嫌悪していたのである。今日という日は己の力のなさと、心の弱さを最も強く感じてしまう日なのである。
「そりゃそうだけど…ってラル？」
こいつ相手に強がっても無駄だと返事を返そうとしたそのとき、ラルゴの体に異変が起こるのが目に入った。そして同時に、ケインも自分の体に異変を感じた。

ケインかキライだった日（２）（後書き）

ｉｐｈｏｎｅ用キーボードゲットしました…

ケインがキライだった日（3）

何が起こっている！
ケインは地面にうずくまってしまった。いうことを聞かない身体を懸命に動かそうとする。まるで金縛りにあっているように自由にならない。玉の汗が全身に浮かび下を向いている顔のあちこちから滴り落ちるのを感じた。
と、頭の中に大きな声が鳴り響いた。
（先に見つけたのは私よ！）
（早い者勝ちだろ！先に印付けてやるぜ？）
（…まーまー、落ち着いて。取りっこよりわけっこの方が楽しいよ～。）
（（…その手があったか？））
（冗談だったんだけど…まあいいか、…じゃ僕も。僕はこっちのにするね。）
おーい、あんた達コッチのこと考えてないでしょう？と、つっ込む前に意識が遠のいてきた…。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

（？…僕は？）
一瞬、今どこで何をしていたのか記憶が途切れていて理解できなかった。
周りを見回すと、新年を祝う祭りの景色が目に入り、和やかな賑わいに満ちているのが確認できた。
（さっきからほとんど時間が経っていない…みたい。）
今度は体を確認するが全く変わった様子は無い。
「そうだ！、ラル？」
ラルゴが膝をつくのをみた記憶がかすかにある。思わず叫んで周り

を見渡すと、すぐ近くに大きな犬がいた。
その犬は亜麻色の毛並みが美しい大型の犬で、昔ラルゴの家で飼っていた犬にそっくりであった。ただしその顔というか、瞳に見覚えがあった。
「…お前さん、もしかしてラル？」
間違えていたら恥ずかしかったので小声で話しかけると、
「ワン！」
としっかりした鳴き声が返ってきた。
「犬でもイケメンか…、あ、犬だからイケワンか。」
僕の軽口に、何を思ったかラルゴ（犬）はのしかかって来た。
その瞬間、全ての時間の流れが遅くなったような気がした。いや、明らかに遅く感じる。そして、ラルゴ（犬）を軽くかわす。
着地したラルゴ（犬）が不思議そうに首をかしげた…。
「どうやら、お互い神様達から力を授かって、…アビリティ持ちになったようだね。」
「ワン！」
一鳴きしてラルゴ（犬）が頷いた。

ラルゴの尊敬する友人

ラルゴが話します。

新年を祝うお祭りが終わり、村がまた普段の装いを取り戻しつつある、そんなある日、ラルゴは村長の家にいた。

あの後、苦労してなんとか人間の姿に戻ることができた。そしてアビリティのことをケインと相談し、まず家族に打ち明け、それからアビリティについて教えを乞うためサラさんのところに話をしにいった。なぜなら、サラさんは村唯一のアビリティ持ちであるから。そうしたら、サラさんからこのことは村全体に関わることだからと村長に報告した方がよい、と言われ村長宅で関係者を集めて話し合うこととなった。

ケインの家からは母親と兄が、ラルゴの家からは両親が、それに村長とサラさんが同席している。

村長（昔から名前で呼ばれているところを聞いたことがないので名前を知らない）はラルゴの知らない話をたくさんしてくれた。

この村にもう少ししたら王国官僚（今でいう国家公務員のこと）が来て年に1度の視察を行うこと。作物の出来柄や村の税金の使い道とか、いろいろと調べられること。その時、村にはアビリティのことを報告する義務があること（というかそのために新年の祭りの後にくるようになっているらしい）。

「つまり、王国に2人のことを報告なければいけないのです。そして2人は王都に赴いてアビリティについて詳しく調べられると思います。」

長い話のため村長が大きく息を乱して話が中断したのを見計らって、サラさんが一番大事なことを伝えてくれた。

「ここは王直轄の村なので、2人とも将来的には王国に仕えるように言われると思います。と言っても、いきなりではなくまず冒険者

を勧められるようです。その功績や行動、アビリティの内容によって王国のスカウトの選択肢が決まるようです。また、アビリティ持ちは冒険者になっても外国には出国出来ません。ちなみに私は冒険者にも王国へ仕えることもしませんでした…私は戦うことが怖かったから。そのため、村へ帰ることを認めてもらえましたが、この村から外へ出ることは禁じられました。このことは村の人は誰も知りません…。」

サラさんは、どこか怯えたように話してくれました。どうも、王国はアビリティ持ちに敏感のようだ。

　それはそうだろうとラルゴは思う。例えば、自分のアビリティは”チェンジアニマル（動物変身）らしいが、それを上手く使えばかなりすごいことが出来ると思う。

ケインの母親と兄は、かなり真剣に聞き入っているし質問も返している。元々ケインは家を継ぐことが無い立場なので、大きな街にでも出て身を立てることを視野に入れていたみたいだった。ケインの家族はケインが王国に雇われるなら文句は言わない、というより喜ぶであろう。ただ、ケインはこの村に愛着を持っている。彼の父親はモンスターの襲撃から村と家族を守るために命を落としている。直接本人から聞いたわけではないが、ケインが強さを求める理由の一つだろう。どうするつもりかな？

　ケインは家族よりずいぶんとのんきな顔をしている。もう、これからどうするかを心に決めているのだろう。普段は好きなクッキーとプリンをどちらから食べようか悩むようなヘタレだが、時々信じられないほど決断力を見せる。

ふとケインと目が合った。不埒な事を考えていたのをばれないで欲しいと思う。あいつはそこらへん異様に鋭いからなと心で考えていると、

「ラルのとおちゃん、ラルはどうするつもり？…ラルが冒険者になるなら僕が守るよ。」

いきなり我が家の今一番の問題に触れてくれやがった。ラルゴは長

男で跡取り、しかもラルゴの家はこの村最大の農場と農作作業者を抱えており実質的な支配者ともいえる存在であった。ちなみに村長は行商をしていたこともあり村の外の事情もよく知っており顔もきくため村長をしている、いわゆる顔役である。
ラルゴの父親は少しの間、難しい顔で黙っていたが、
「王国に属する身分である以上、ラルゴのことで何かを言われたら王国の指示に逆らう事はできない。…だが、…出来れば冒険者になって認められる功績を立てた後は、王国に顔が利く身分で村に帰って来て欲しい…。」
ラルゴの家にとっては確かに理想的だ。
（現実派の我が親父殿にしては希望的要素が随分強いし、不明確な要素が多すぎる、イマイチだな。）
ラルゴとしてもそうありたいが、あまり時間がかかるようでは弟に悪い。
「ラルゴの弟もシッカリしてるからさ、どちらが後をついでもいいようにシッカリ決め事をしとくのがいいんじゃない？こいつはラルのためを思って言ってるんじゃない、正直、この村に憂を残して出て行きたく無いんです。人の家の話に口出しして悪いけどさ、…もう戻ってくる事ないと思うから。」
ケインは、我が家の、つまり村の大問題を…分かっていてもラルゴの父親が言えなかったことをアッサリと言い切った。
（相変わらず決断力がすっ飛んでいるよカイン、俺はもし親父殿のようにリーダーを任される立場に着いたなら間違いなくお前を手本にするよ。）
ラルゴもこれから自分がどうするかを、全力で決断したいと思った。
（ただ、あの押しの強さを何故、ガールフレンドを作る事に使えないのかね…。）

ラルゴの尊敬する友人（後書き）

ラルゴはケインをかなり買いかぶっています（笑）

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（１）

王都に近いある森の中、３人の人間が地面に空いた入り口の奥、階段の先の暗闇を見つめていた。
１人は灰色の髪のケイン、その右横に亜麻色の髪をしたラルゴ、左横のもう一人は金髪の女性である。女性は緑眼で背もスラリと高く胸もある。顔も美しく妖精族なのではとうたぐってしまうが耳はとんがっていない。
（まあ、年齢は俺たちより…）
カインがそこまで考えた瞬間げんこつが落ちて来た。
「…今、私にとって不愉快なことを考えていたな。」
痛む頭をお抑えながらこの人は絶対読心術のアビリティを持っていると心の中で呟いた。
「ケインお前、女性にそんな視線向けたんじゃ…バレバレなんだよな。先ずはタチアナさんに謝れよ。」
女性慣れしているラルゴがフォローを入れる。
「でもラル！痛い思いをしたのはコッチの方なんだよ！なんで僕が…ゴメンなさい。」
タチアナの絶対零度の視線を浴びているのに気付き、完全降伏する。
「…とにかく、もう一度確認のために言っておく。このダンジョンはモンスターの駆除が終わったばかりだから、まだ集団で襲われる確率は少ない。マップチェンジ（※）も先月したばかりだし、大体１階層しか無いのだから１日で攻略できる。まさに卒業テストにはふさわしいダンジョンだ。存分にアビリティをチェックしてくるがいい。だが、くれぐれも油断するな。ここのモンスターは弱いパペット（人形）しか出てこないとはいえ、初心者のお前達の方が間違いなく弱いのだから…」
タチアナはラルゴには微笑んで、ケインには氷の視線を向けてこの卒業テストの内容を伝えて来た。

王都に呼ばれてこの一月の間、2人は戦闘技術や歴史などの学問、そしてアビリティについて学んだ。
タチアナは今回2人の師匠役を任さた紋様術師である。アビリティ持ちにはその能力を高めるための紋様を体に描く。ケインとラルゴの2人に紋様を描き、その能力の解析と強化を行ったのはタチアナである。
当然アビリティについても調査した。ラルゴは予想通り”チェンジアニマル（動物変身）”であった。カインは”ブースト（身体能力強化）”…らしい。
カインの方を断言できないのは、色々とあって、体に紋様を上手く描けなかったせいである。
この一ヶ月で2人ともある程度アビリティを使いこなすことが出来るようになっていた。今回はそれを実践で試すわけである。
「ではタチアナさん、行って来ます。」
「死なないようにガンバってくるよ。」
2人はタチアナに挨拶をして階段を降りていった。
「…ハーティア、いるわよね。」
「三歩後ろにいます。」
タチアナの小さな声に返事があった。
「隠れてサポートをお願い。生かさず殺さず、死にそうにならない限り手を貸さなくていいわ。それよりケインのアビリティの観察をお願い、今まで見た紋様のどれよりも解析が難しいの。」
紋様はアビリティ持ちに元々ある印のようなモノを筆に付けた特殊なインクでなぞることで浮かび上がる。
ずっと昔から紋様とその発現される能力を記録して来たことで、今日はかなりの高確率でアビリティを言い当てることが出来る。だがまったくの新種のアビリティは理解不能な事が多い。そのためにも今回は特別にダンジョンまで用意して”姿隠し”のアビリティを持つハーティアを呼び寄せたのである。
「この迷宮のあれは…2人にはまだ教えてないんでしたよね。サポ

ートが間に合わず死ぬかもしれませんよ？」
「構わん、データが取れれば元は取れる。」
「…分かりました、それでは追跡を開始します。」
ダンジョンに入りながらハーティアは心の中で2人を無事帰還させることを誓った…彼もまた1人のアビリティ持ちなのであるから。

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（１）（後書き）

マップチェンジ：ダンジョンフィールドは不定期でその構造や壁の位地が変わる

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（２）

ケインとラルゴは薄暗いダンジョンの中をゆっくりと進んでいた。
「灯りが要らないのは助かるよな～。」
「まったくだね。」
ラルゴの漏らした言葉にケインは前を見ながら同意の意見を返す。
人工ダンジョン（迷宮）は天井面が発光していて、灯りが要らないと説明を受けている。しかし、トラップ（罠）が発動して消えてしまうこともあるらしい。このダンジョンにはいるに当たり、２人が先ず覚えさせられたことは、目隠ししての灯りの起こし方であった。装備に関していえば、２人とも貸与された皮鎧と硬帽子、棍棒（松明にもなる）、これに予備の短剣を腰に付けている。このダンジョンに出現するモンスターのパペット（人形）は石のような材質で出来ているらしく刃物はあまり役に立たないと聞いている。
２人ともモンスターと戦った経験はない。しかし、野生の獣と戦うことはよくあった。村に野生の獣が現れ作物を襲うことが少なく無かったのだ。特に多かったのがスキンヘッド猪で、畑の作物を我が物顔で食い散らかす上に、近づくと突進して来て相手を吹き飛ばす厄介な相手だった。村の男衆総出で退治することもしばしばあった。村では子供だったし、実質的な村の代表の跡取り息子だったのでラルゴはあまりそういうことの前面に出ることは少なかったがケインはよく前に出た。弓や槍で小物を仕留めたこともある。
　ただ、剣の稽古をつけてくれた王国騎士さん曰くラルゴの方が逸材らしい。ケインでは練習試合（アビリティなし）で全く触れることのできなかった騎士からラルゴは綺麗な一本を取ったのだ。
（僕は、この先こういう仕事で生きていけるのだろうか？）
ケインは自分の実力不足を感じると落ち込んでしまうタイプで、今も前を向いてはいるうちにいつも間にか俯いている自分に気がついてまた落ち込んでしまうことを繰り返していた。

「ケイン、あれっ！」
ラルゴの警戒の声で集中力を取り戻す。少し前方の床面の一部が発光している。そこから、ゆっくりと人型のモンスターがせり出してくる。
モンスターの頭に握り拳大の石を投げつけた。しかし、ぶつかる直前に弾かれパコッと軽い音がした。
「…やっぱり発光が収まるまでは攻撃は効かないんだな、っよっと！」
ケインは発光が収まるのを見計らって、もう一度石を投げつけた。
「いつの間に用意したんだよ…そんなの。」
「迷宮に来る途中で、2、3個ね。一応確認用だよ、実際効かなかったし。来るよ。」
2個目の石は胸にぶつかったがたいして効いていないようだ…。
さあ、始めてのアビリティバトルだ！ケインは気合のこもった声を発しモンスターに突っ込んでいった。

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（３）（前書き）

設定を修正しました。
粘土細工のように潰れた→陶器のように砕けた

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（３）

モンスターは人型を取ってはいるが全く生命を感じさせない動きをして向かって来た。
パペットと呼ばれるこのモンスターはダンジョンによってかなり違いがあると教えられた。
今向かって来るパペットは大人の大きさほどで２人よりも背が高い。身体つきは細身だが、腕の長さが肩から膝まであり異様に長くみえる。体の表面は茶色で光沢があり天井から発せられている灯りを照り返して正直不気味だ。顔はのっぺりとしていて表情はなく真ん中に赤く光る石のようなモノが埋まっている。
「アビリティ発動！」
突進しながらケインは大きな声を上げた。紋様術によって描かれたラインが紫色に輝き浮かび上がる。ケインは顔や瞳にまで紋様を施されいるので、ラルゴのには迫力あるし目立つね～と笑われたが。ちなみにかけ声は発しなくてもよいのだが、初心者のうちは発動のイメージを固定するために発声するように指導されている。
パペットは両腕をでんでん太鼓のように振り回してきた。
かなりの加速を伴って自分に向かって来るソレを…ケインは世界がゆっくりになるのを感じながらじっくり観察した。
（…関節は無い…前腕は硬そうで手のひらはなく指？いや爪が手首の辺りから直接生えている…上腕は太いゴムひものような感じかな、伸びるだろうから注意しよう）
旋回する両手を回避して懐に飛び込む。タチアナからゆっくり感じるのは身体能力が上昇し加速しているからだと言われた。
（狙いは足首！）
思いっきり棍棒を振り下ろす。ビキリとヒビが入るのが見えた。
両手による旋回攻撃のため足を踏ん張っているのを観察していたのでここを傷めれば旋回攻撃ができないと踏んだからだ。

案の定、パペットはバランスを崩して次の旋回攻撃に移れない。
同じくアビリティを発動させいたラルゴが、ここぞとばかりに棍棒を振りかぶって跳躍した。パペットはケインを無視して片腕を前方のラルゴにつき出そうとしてた。
（…相打ちくらいのタイミング、被害はラルの方が大きい、…やらせない！）
一瞬でパペットの側面に回り込み棍棒で腕を突く。止めることはできなかったが、攻撃方向を狂わせることに成功した。ラルゴの渾身一撃が振り落ろされる！
がきん、といい音がしてパペットの頭部が陶器のように砕けた。
崩れ落ち、完全に動かなくなったこと確認して2人は歓声を挙げた。

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（４）

「しかし、その”限定発動”って便利だね。」
パペットを倒し、２人は背中合わせで座りながら水筒の水を飲みながら反省会をしていた。
ケインはラルゴのアビリティ”アニマルチェンジ”による跳躍は自分のアビリティ”ブースト”より勢いがあったように感じた。ただし、動物の姿になっていたわけではない。
「タチアナさんがアビリティは型が決まっているわけではないから、自由な発想で使えっていってたからさ。まっなんとなくできるかなって練習してたら、…なんとかなっちゃうもんだよな、…アビリティってオモシロイな。」
”アニマルチェンジ”は自分がよく知った動物にしか変身できないらしい。アビリティは総じてイメージが大事なようでラルゴはまだ昔飼っていた犬にしか変身出来ない。タチアナさんの特訓で本物を見ながらなら猫に変身出来るようになってはいたが、それ以外はまだ無理だった。
また、犬の身体能力は人間より優っているところは多いものの、戦闘に関してだけいえば武器や防具を使える人間の姿の方が有利なことも多い。なら変身しないで動物の能力だけを発現出来ないかって考えたらしい、今回は犬の脚力だけを発現したかたちになる。
「ラルのあの動きを見て、タチアナさんが一番驚いていたのは笑えたよな。」
「…はは、でも普通に発動するよりも効果が出るまですこし時間がかかるのがネックだな。正直、同じタイミングだったらケインならたくさん攻撃できるし。」
「うん、…それで…別の話がしたいんだけど…僕の動き、おかしくない？」
「どこが？」

「って、自分でわかんないから聞いてるんだってば。」
「わけ分からん、…もう少し説明しろよ。」
ケインは少し迷いながら、
「僕のアビリティは”ブースト”っぽいって言われてるじゃない？ただ、過去の記録を見してもらったけど、なんか違うような気がして。どっちかっていうと”ヘイスト（加速）”に近い気がするんだ。」
「でも、ヘイストはほとんど筋力は上がらないって話しだろ。その話、タチアナさんも調べてくれるって言ってたじゃないか。」
「…そうなんだけど、…ラル、実はタチアナさんに話していないことがあるんだ。」
「…わかった、話してみろよ。」
一旦、周りを見渡してパペットが湧いてきていないのを再確認してからケインはアビリティ獲得のときの自分の頭の中に響いた”誰か達”の会話のことを話した。
「…ってことは、2人の神様にアビリティ貰ったってことか？」
「…多分。」
「まあ、それじゃ気になるよな。…うーん、たしかに言われてみると…ときどきケインの姿が見えなくなる気がする。早くて目で動きが追えないだけなのかもしれないけど。」
「そうか…ありがと。あと、ラルの方も気になるんだ。」
「は？」
「僕はラルが倒れるのを見てから、自分の身体に異変を感じたんだ。あの人達の会話から感じて3人目の人ってラルにアビリティを授けたっぽいんだけど。ラルが倒れた原因がアビリティ獲得なら、ラルも…。」
「じゃ、なにか。俺も2つアビリティ貰ったってことか？」
「正直あの時、頭の中がぐるぐるしてたから、本当にそんな会話が有ったかも自信無いんだ。」
「…まあ、いい方に考えろよ。2つアビリティ貰ったかもしれない

なんてすごくないか？ウルトララッキーだよ。たとえそうでなくても損はしてないし。」
ケインはラルゴのこんなところを羨ましいと思っているが、絶対言わないようにしている。そんなことをいえばお互い恥ずかしくなるだけだ。
「…だな、そろそろ探索を再開しようか。」
「ＯＫ」
「それと、さっきのパペットをへの攻撃、あれやめろよ。」
「なんで？」
「大振りで、隙が大きすぎる。僕が攻撃を逸らさなければ大変なことになってたよ。」
「…結果オーライで、いいだろ。」
ケインはここでラルゴの声が少し変わっていたことを、怒っていたことを気付けなかった。そのことを後になって随分後悔することになる。

「アビリティ発動！発動！もっと早く動け！自分！」
焦りと混乱で息が苦しい。パペットの攻撃をかわしてから一気に距離を取る。パペットと同質と思われる障害物に身を隠して、様子を伺いながら息を整える。
（さっきラルと倒したパペットよりずっと強い！…ラル、死ぬなよ。）
ラルゴがいると思われる壁の向こう側をチラリと見ながら親友の身を心配する、そして打開策を見出す為に先ほど起こったことを思い出す…。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「結果オーライじゃあいくつ命があっても足りないよ。」
ラルゴの行き当たりばったり的な考えを否定する。
「そもそもラルは基本家に帰ることを視野にいれているんだからもっと慎重に動けよ。」
「家は関係ないだろ！！お前何様のつもりだ！！」
もの凄い怒鳴り声が帰ってきてケインは正直びっくりした。
「…そうだ、アレだろ。初モンスターを俺が倒したんで嫉妬してるんだろ。みっともない！」
「はぁ？そんなわけないだろ！」
「いーや、お前はそんなやつだね、前にミーナちゃんにお前が告白しようとしたとき、呼び出した俺にミーナちゃんが告白してきたからむっちゃ嫉妬してたじゃん。」
「それこそ今、思いっきりカンケーないだろ！ラルは後先考えなさすぎな上にジコチューだよ。」

「だーかーらーっ（？）」
ラルゴがさらに何かを言い返そうとしたそのとき、２人の間にポンという音とともに白い煙があがり、煙の消えた場所に１人の子供が立っていた。
その姿は、美しいの一言に尽きた。性別や年齢を超越した存在に思えた…神だと言われればそのまま信じたと思う。
「とりあえずわかったから。全て僕に任せて！ゲームで解決しよう。」
全くわけの分からないことを言われました…。

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（６）

「ぼくのことはＧＭってよんで。ルールをせつめいするね、いまからこのだんじょんふぃーるどを２つにわけてそれぞれ１たいずつパペットをよういするから。さきにたおしたほうがかち！しつもんはないね♪」
ニッコリと笑いながら神？のような子供は一方的に説明を始めた。
そしていきなりケインの方を指差して、
「…と、そのまえにきみはジャマだからたいしゅつ♪」
ポン？と音がして振り返ると、ケインの後ろ三歩ほどの位置に煙が上がったのがみえた。
「今誰かの人影がチラッと見えたぜ。」
見える位置にいたラルゴがケインに説明した。
「じゃ、よういするね♪」
と言って子供がポン？と煙になって消えた。
静まり返った空間で２人は目を合わせた。鏡でみれば、今の困惑した顔はお互いそっくりだろうと思った。
やがて、フロア全体が大きな音お立て始めた。一番外側の壁以外、壁という壁が床面に吸い込まれてなくなる。あちこちにパペットが見えたが皆、出現したときと逆に床面に沈んでいった。
もの凄い広い空間ができあがったと思ったら、今度は逆に床から５０センチ角のキューブ（立方体）がドンドンとせり上がって来た。空間を２分する壁とランダムな位置に小山（こちらは適度に配置された障害物だと思う）が出来上がって来た。
「うわ？」
いきなりケインは煙に包まれ、気が付くと見たことの無い場所に立っていた。４つある壁面の１つがキューブで、今まさに完成しつつあった。
（反対側に転移させられた？アビリティ！ダメだ間に合わない！）

全力で向かうものの、到着する直前に壁が完成してしまった。
（じゃ、スタート♪）
どこからか声が聞こえた直後、床の一部が発光し始めた。先程倒したパペットが現れたときよりはるかに大きな範囲が…。
（さいごにルールのせつめいをもうひとつ、さきにたおしたパペットのところにだけ、ちじょうへのかいだんをよういするからね♪）
「ッ！ラルー！！」
ケインは向こうに聞こえないと、届かないと思っても、叫ばなければいられない気持ちだった。

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（７）

今回はラルゴが語るお話です。

ラルゴはパペットがいる場所から随分離れた場所で寝転んでいた。
ゲームが始まってからすぐの攻防で棍棒は折れてしまっていた。
犬に変身して駆け回って今に至る。
（隠れ鬼ごっこは卒業したつもりだだったんだけどな。）
案外平気でいる自分に驚きを感じている…。
（バカケインはこいつを倒せるかな。）
時々、近づいて短剣で攻撃したが（アビリティで変身すると、服とか身につけているものも取り込んで変身することができる。意識しないと出来ないので、まだときどき失敗して人間に戻るときに裸になってしまうこともあるが）全く効かなかった。
武器のいらない、それでいて攻撃力のある限定発動アビリティも覚えればよかったと思う。たとえばゴリラの力だったらこのキューブ投げれたかもしれない。
（まあ猫で手こずってるんじゃ、他の動物では無理すぎるけど。）
幸いなことに背の低い犬にとって５０ｃｍ角のキューブは視線を遮るいい障害物だった。キューブは高いところで３段（計１．５ｍ）まで積み上がっている。
（…ケインならこの状況どうするかな？あいつだけでも地上に脱出てほしいけど。）
あの説明からするに１人しか外に出られないらしい。
最もあいつは１人で出ようとしないんだろうけどと思っていたとき、いきなり壁が…４つの壁で出来ている、四角い空間を作る１つの壁、つまりキューブが積み上がって出来たものが大きな音とともに弾け飛んだ。キューブ縦横２つづつ計４個分がこちら側に押し出されるかたちになりその分だるま落としの要領でキューブが下に落ちた。

当然、天井に近い最上部に穴の空いた空間ができる。
ラルゴは笑いながらそこを見上げていた。
（あいつらしいや。）
すぐにそこには彼が、…先程バカ呼ばわりした親友が現れた。

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（７）（後書き）

次で戦闘は終わらせたいです。

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（８）

ケインは素早くあたりを見渡して、パペットと、ラルゴ（犬）の位置を把握した。結構な高さをひらりと降りる。そして一気にダッシュしてラルゴのところまでかけよる。

「壁から離れて！」

注意してから振り返ると、轟音が鳴り響いてキューブの壁が崩れパペットが現れた。

「無事でなによりだけど、出来ればあれを連れて来て欲しく無かったよ。」

「壁を壊してくれたからもう用無し！！ラルかたずけて。」

「俺か！しかも２体！」

「無理？」

「むりむーり。」

「じゃ、２体２で…」

ケインはパペットから距離を取るために、走りながら幾つか策を話した。

「ＯＫ！アビリティ発動！」

ラルゴは犬に変身してパペットの１体に向かう。

パペットは２人で倒したものより頭１つ分大きいし速さもある、力の強さは見ての通り重いキューブを軽く殴り飛ばす。かたちの違いは腕のさきが爪のようなものではなくってトゲトゲのある鉄球とこぐらいだ。腕は振り回すより直線上に射出することが多い（チェーン付きで巻き戻される）。

（僕達に戦闘技術はない！けど！）

１体のパペットに向かい攻撃を交わしてすり抜け、ラルゴを追いまわすもう１体に近づく。ケインに誘導されたパペットが追いかけてくる。ラルゴもケインの方に向かってきて、２体のパペットが同時に鉄球を射出する！

（今！）
いまから行おうとすることを強くイメージする。
（アビリティ全開！！）
自分に向かいくる鉄球を棍棒で打ち付けて軌道修正し、ラルゴに向かう鉄球に回り込む。
犬のラルゴに向かって打ち出された鉄球の軌道は下向きのため先程より強く打たなければならない。
（いけー！ホームラン！）
かきーーんと金属バットのような乾いた金属音を残して鉄球はパペットの方に向かう。
見事命中！２体とも胸に大きな穴が空いてズシンと大きな音を立てて倒れた…。
「ういなー…ええとにんげんのほう！…たぶん。」
…随分と大雑把な勝利宣言が聞こえた。

えっ？テストでデットｏｒアライブですか？（９）

「よくせいかいをえらべたね♪」
何時の間にかケインのすぐそばにいたＧＭはパチパチと拍手を送ってきた。
さっきは神々しい感じがしたが今はイタズラっ子にしかみえない。
「パペットとおなじいろにしたし、キューブのかべもつみあがるのもみせたから、だぶんだいじょうぶだとおもったけど♪」
「大丈夫なわけ…」
反論する前にＧＭはポン？と音を立てて消えた。
（しょうひんは、パペットのめのほうせき、いいねで売れるよ。あと、ボーナスあげるね♪きみたちのアビリティは２つだよ。）
床面から階段がせり上がってきた。天井面の一部から外の明かりが見えた。
（たのしかったよ、またあそぼうね♪）
「…一方的になやつだったね。」
「ホント、正直もう会いたくないぜ。」
２人で宝石をパペットの顔から穿り出す作業をしていると、
「ケイン、あのさ、最初のパペットを倒したとき、俺が無茶したのは、…お前がなんとかしてくれるって思ったからだ。」
ラルゴがいつになく素直な口調で話しかけてきた。
「…きずかなくてゴメン。…僕もさラルを信じることにするよ。」
このときケインは生き残ったことより、なぜか、”生きていること”がとても嬉しかった。

タチアナ史上最大の屈辱

ケイン達の騒動があった日から数日後、術師会館の比較的簡素な部屋にタチアナはいた。
今回の顛末の報告、というより査問会である…。よくっもまあ長老達がこれだけ集まったものだとタチアナは驚いた。
（いくら私が王国一の美貌の持ち主だといっても、…みんな暇なのね。）
やがて、最長老が声をかけて来た。
「さて、タチアナくん。こっちへ来てくれるかな。」
長老達の席の近く、対面する位置に椅子がある。
タチアナは礼もせず、そこに座る。その態度に長老達から不満の声が上がる。
（いびりたければいくらでもしなさいよ。）
タチアナはここにいる誰にも頭を下げたく無かった。
「ただの報告会だ、堅苦しくする必要はないよ。」
ほとんど会ったことが無いのでよく知らなかったが、最長老はどうやら話のわかる人物のようだ。
「じゃあ、始めよう…今回の件の報告書はもらっている。新種のアビリティの調査のため、高い金を払ってダンジョンを用意した、Aランクの冒険者も雇った。
だが、結果として調査は失敗した、
ダンジョンは今侵入不可能だと。
…これで間違いないね。」
「…はい。」
拍子抜けするほどは話しが早い…。これならすぐ終わるかもとタチアナは少し期待した。
失敗というより言葉に反応してか、また長老達から不満の声が上がったりしてザワザワし始めたが、最長老は手を上げてそれを制した。

そして、ここからタチアナにとっては予期しない展開になった。
「タチアナ君に落ち度はないから特に懲罰はなしだよ。…ただ、調査からは外れてもらうね、師匠役も終わりだ。」
「了承しました…。」
「じゃあ、その件は終わりにしよう。」
あまりにも甘い裁定と早い査問の終わりに返って戸惑ってしまった。
「じゃあ、タチアナ君はこちらに座り直して。」
長老達の席のはじっこ、つまり末席を指してそこに座るようにタチアナに指示がでた。
（…目的は何？これから何が始まるのかしら？）
「じゃあ、ハーティア君を入って。」
扉から入ってくるハーティアに、今回雇っていた姿隠しのアビリティを持つ男に視線を送る。
「わざわざ来てもらって済まないね。」
「お気になさらず、上司が最長老によろしくといっておりました。」
ハーティアが挨拶を返す。
「皆に説明しておこう。彼は私の知り合いの配下で冒険者だ。タチアナ君の要望に彼を押したのは、その私の知り合いが信用が置ける人物だと推薦してくれたからだ。」
周りの反応を確認するように少し間を置いて
「…今回は彼の上司が私に気を利かせてくれてね、面白い話を持って来てくれた。ハーティア君、君の口から報告してもらえるかな。」
「はい、…今回の依頼はアビリティ持ちのケインとラルゴの2人を監視して、新しいアビリティの情報を得ることでした。結果的にそちらはなにも得られませんでした。
しかし、2人は面白いことを話していました。」
タチアナは自分の方をみようともしないハーティアの話っぷりに、自分に不利になる話が始まるのだろうと予想し…的中した。
「2人ともマルチアビリティ持ちの可能性があります。」
ハーティアが2人の会話を再現するように話しながら報告すると、

部屋の中はどよめきに包まれた。
２つ以上のアビリティを持つ者をマルチアビリティ持ちという。非常に珍しいケースな上に、１度に２人ともなると前例がない。
このとき、最長老の視線にタチアナは気がついた、そして意図するところも。
「非常に興味深いことで、これから追跡調査が必要になる。
だが、残念なことにタチアナ君が今、それを外れたために後任を決めなければならない…さてどうしたものか。」
（…私から２人を取り上げて、…これほどのサンプルを奪って、それを誰が研究するのか決める席に私を座らせて！
これが本当の罰なのね、なんていやらしい。）
心の中で、タチアナ史上過去最大級の憎悪が渦巻いたが表情には出さない。そんなことをすれば最長老を喜ばすだけだ。
その後、タチアナは一言も発言することもなく、ただ椅子に座ってこの拷問が終わるのを待った。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（1）

王都からさほど離れていない位置にララカルという街がある。海に近く、山も近く、農作も盛んで、工業地帯もある上、温暖な気候で観光スポットとしても人気がある街である。

（…つまり冒険者としては、仕事が多くて理想的だよな。）

ケインはラルゴと繁華街を歩きながらそんなことを考えていた。

「ねえ、ハーティアさん、あそこは？」

「ああ、この辺では有名なお菓子のお店でね…」

ラルゴが案内をしてくれるハーティアさんに気になる看板、お店、服装など様々な質問を浴びせていた。ハーティアさんもいちいちそれに付き合って説明してくれる。

（やめてくれよ…田舎者丸出しだよ…。）

王都での訓練を終えて、2人は王国の官僚から、暫く冒険者をすることを進められた。特に強力なアビリティ持ちはそのまま王国に雇われる（いまでいうと公務員になるってこと）こともあるそうだが、ケースとしては少ないらしい。返って気楽でいいとケインは思う。

タチアナさんとはケインはなぜか王都を出ることが決まってから会うことができなかった。苦手としているので積極的に会いたい相手ではないがお礼くらいは言いたかった。一応手紙は置いて来たが。

ラルゴも出発前日に1度だけ話せただけだといっていた。

今回はハーティアさんという先輩冒険者が相談役として自分達に配置された。冒険者として拠点となる街を決め、冒険者として生活する場所となるパーティーハウス（通常ハウスと呼ばれている）を紹介し、冒険者として登録してファーストミッションをこなすまで面倒を見てくれる、そんな役を彼は王国から受けているとのことだ。

「もうすぐ1件目のパーティーハウスに着くからね、さっき言ったとおりまず筆記と面接が絶対あるよ。

因みに私は外で待っているからね、私と一緒にはいると判断力や決

断力がない人物だと判定されるんだ。緊張しなくていいから頑張っておいで。」
（うう、そんなこと言われると余計に緊張するじゃん。）
ケインはそういうプレッシャーにいつも全然動じないラルゴが羨ましいと思う。
やがて、案内された建物の前でハーティアさんと別れ2人は中に入っていった。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（2）

カンカンキンキンと音が響く。
早朝、2人はハーティアさんに剣術の指導を受けていた。
二人掛かりで切りかかって行っても全然平気で、逆に切り返される
（ハーティアさんはわざわざ歯を潰した練習用の剣を用意してくれていた）。
（Aランクの冒険者って、すごすぎ。）
「剣はこのくらいにしましょう。次はアビリティを使って全開で来なさい。」
ハーティアさんは剣を置いて木でできた短剣を持って構えた。ケインも短剣にする、こちらは本物だ。
「ラルいくよ、アビリティ発動。」
ハーティアさんの正面に高速で移動し左右に動いて攻撃のタイミングを探りながら隙を作ろうとする。
と、後ろからラルゴ（犬）が噛み付こうとするがハーティアさんは振り向きもせずによけて拳骨を下ろす。
「（ゴツン）はい、脱落。バレバレだよ…。」
（自分が気を引いて、ラルが奇襲。悪くないと思ったけど…。相手が悪すぎ。）
ケインはさらに早く動くことをイメージして側面から攻撃を仕掛ける。
ハーティアさんの左拳がケインの顔に伸びてくる。かわして懐にはいった。
「おごうっ！」
何が起きたかわからなかった。何時の間にか地面に這いつくばっている。ハーティアをみると攻撃したままの姿勢で止まっていてくれた。膝蹴りを顎に受けたようだ。
「あんな誘導に、引っかかっちゃダメだよ。」

手をヒラヒラさせながらレクチャーする。
「これがＳＣＭ（※）。大いなる過去との連環記憶、王国がアビリティ持ちを冒険者になることを勧める理由だ。」
２人はに罰としてスクワットを指示しながら話を続ける。
「過去の遺跡、ダンジョン、過去の魔法文明が作ったモンスター達。それらに長年、接することにより科学でも魔道でも説明のつかない身体能力の成長や知識が身につく。
たとえアビリティ持ちとて、これを得た者に相対すれば勝つことは容易ではない。」
ラルゴと目を合わせてみると、同じことを考えているとアイコンタクトで返して来た。冒険者として十分な実力をつけるのは、はるか彼方、先の先、長いな～と実感した。
「ちなみに昨日のパーティーハウスからは採用を見送るって連絡が来たからね。」
とどめを刺されました。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（２）（後書き）

※ＳＣＭ：スーパー・チェーン・メモリー
ゲームでいうところの経験値を表現する苦しい言い訳。本来ＳＣＭはサプライチェーンマネジメント（材料の生産から需要・購入に至るまでを一つのチェーンにみたてた経営・管理の一手法）の略語

ララカルの街にて…冒険者業に就職（3）

朝の修行の後、支度をしてパーティーハウスに向かう。今日のパーティーハウスは本命になるだろうと説明してくれた。なんでも対応が丁寧で良心的なパーティーハウスとし有名ならしい。

「それにしても、ケイン君のアビリティは不安定ですね。タチアナさんはそんなに腕の悪い紋様術師ではないと聞いているのですがねえ。」

ケインが聞いたところによるとタチアナは若手有望株の1人らしい。他のアビリティ持ちがタチアナのところにメンテナンスをしに来たときに聞いたのだ。紋様は描いておしまいというものではなく、月に1度の頻度でメンテナンスが必要なのである。描いた者が担当する必要は必ずしもないが、メンテナンスは描いた者、またはその門下生が担当するのが普通だ。

ハーティアさんの呟きに、爆笑という反応をしたものがいた。ラルゴだ。

「それには理由があるんですよ、タチアナさんがこいつに紋様を描いている最中に緊急のメンテナンスが入ったんです。相手が貴族ですぐに来いって言われて。

しょうがなくタチアナさんはそこからハイスピードで描いたもんで、アビリティは不安定、アビリティの解析も上手くいかなくなったってて。

だから、タチアナさんはケインをみると自分の駄作をいつも見せられてる気分になるから嫌なんだって。」

あの冷たい視線は僕ではなく紋様に向かってたわけだ…僕が嫌われていたわけではない？ようだ。

「紋様のリライト（上書き）は1ヶ月は間を置かないといけないはずだから…、そろそろリライトが出来るんだろう？ならパーティーハウスが決まってからですね。

パーティーハウスごとに懇意にしている紋様術師は違うからね。」
ハーティアは哀しい者をみるような、生暖かい視線を送ってきた、
やめて欲しい。
「そろそろ着くよ、その角を曲がってすぐだ。
行ってらっしゃい、骨は拾ってあげるから。」
最後に変なことを言ってきたがハーティアさんのセンスはこのところ同行してもらって理解している。
「頑張ります。」
「骨を拾われてやるぜ、待っててくれ！」
調子を合わせたラルゴの返事に力が抜けていくのを感じた…それはそれで良いことなのだろうと思うことにした。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（4）（前書き）

この作品を読んでいただき本当にありがとうございます。
感謝感激雨あられの心境です。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（4）

☆ハーティアが語るお話です。

パーティーハウスに入ったケイン達がまっすぐ受付（と言ってもバーのカウンターのようなところ）に向かっていくのが見えた。
ハーティアは2人の後ろから入ったのですぐ近く、ケインの三歩後ろにいた。当然、姿隠しのアビリティを使って忍び込んだのである。
「冒険者のパーティーハウス”遅咲きのスズラン亭”へようこそ。御用はなあに？」
栗色の髪の毛をしたちょっとふくよかだが、愛嬌があって、どこか包容力があって、笑ったとしたらコロコロ笑ってくれて釣られて笑みをこぼしてしまいそうな、そんなことを感じさせる、将来いい奥さんになること間違いな知って感じの若い女性が話しかけてきた。
「わっ、私達はアビリティ持ちのラルゴとケインと言います。本日は、お、御社じゃなかった、きっ、貴社の冒険者のパーティーに参加させていただきたく思いまして、まかりこしまかりました！」
（…ラルゴ君、もう君ホネ状態だよ。…サララも引いてるし。）
絶望に打ちひしがれながらも、ハーティアは希望を込めてケインに視線を送った。
「ラルもういい、かわろう。」
我らがケイン君が前に出て話を引き継ぐ。
「すいません緊張してるんです。改めてお願いします。僕達2人に冒険者になる機会をください。」
ケイン君はそう言って頭を下げた。
「王都からの新人さんね。でも良くここが見つけられたわね。うちは小さいし、”こんにちは冒険者のお仕事さん”にも応募も出していないからだれかに教えてもらったのかしら。」
ヤバイと思って、脱出の用意を始める。

「ハーティアさんからここが本命だと言って連れてこられたんだけど…。」
その途端、サララの体から黒いオーラのようなものが見えた気がした。「ティーが…全世界の半分を敵に回すアノオトコがここにきているのね。」
もの凄いことを言われたと、動きを止めてしまったことを後悔したが後の祭り。サララはカウンターから出来て自分の足元をさした。
「3秒あげる…3、2、1」
「ゴメンなさいゴメンなさいゴメ…ゲコッ？」
サララの指差した足元の位置に時間内に姿を表して土下座をして誠意を見せたが…踏まれた。
「ヤッパリ、ハーティアさんついて来てたんだ。」
ケイン君が半眼で…見下ろしている！
（ここは先輩冒険者として威厳をしめ…）
「あと１００回！」
サララの命令に従い、踏まれたままの姿勢で謝り続けた（爆涙）。
「ケイン、なんか聞いていたのか？」
ラルゴ君が信じられないもの見るような顔をしながらケイン君に聞く。
「イヤ、今朝からハーティアさんやたらハイだったし。昨日のパーティーハウスのこと報告したときもダメダメだった事を聞いて安心ていたし、多分…」
「ここに足を踏み入れるのが怖くって、この子達をダシにしたんでしょ。」
ちょっと、力を入れるのを強めないで弱めて欲しいですね。
「ちなみに、ナゼ全人類の半分を敵に回したんですか。」
「アビリティを使って、こともあろうに私の妹の着替えを覗いたのよ！」
「誤解だって！あれは不可抗力だべしっ！…」
強く踏まれすぎて喋れなくなってしまった…。言論の自由よ、いず

こへ！
「…えっと、ラルと近くでお茶して来ますから、ごゆるりと。」
にっこり微笑みながらケイン君は出て行った…。当然ラルゴ君も。
「あと９９７回！」
「さりげなく１桁増えてません？」
結局、ケイン君達のことを話し合うのは翌日に持ち越しとなりました。
私？もちろんホネを通り越して灰になりました。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（４）（後書き）

王都の名前はまだ思いつかないのに、ララカル（街の名前）はすぐに思いつきました。不思議ですね。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（5）

カリカリカリカリ…、鉛筆で書く音が静かな部屋の中に響き渡る。
今は”遅咲きのスズラン亭”で筆記試験を受けている。
筆記試験の内容は簡単だ。だが、冒険者になるには必須の技術を問うものである。
なぜなら、この国の農村では識字率が低いので字が書けないものも多い。数値を扱う算術はなおさらなのだ。
ケインは元々村を出る事も検討していたので、父親のあとを次ぐ予定であったラルゴの勉強に付き合うかたちで色々と覚えていたのが役に立った。
「昨日は本当にゴメンね、ティー君がみっともないところを見せて。」
（ティーがティー君になってるから仲直りしたみたいだな。）
テスト中に話しかけてくるサララさんの態度にどんなものかと思ったが、緊張を解いてくれようとしていることが雰囲気的にわかったので気にしないことにした。
「本当にハーティアさんのあの態度はびっくりしたよ。でもなんか昨日よりずっと楽しそうですね。」
ラルゴが言葉を返す。
「そうなの！昨日は皆で払ってて、お父さんはいつも通り放浪の旅出てるしリリカは基本寄宿舎で寝泊まりしてるし、一人っきりだったから結構ブルーっだったのよ…、そんなときティー君が久しぶりに帰って来たじゃない？もう、ティー君でば…（エンドレス）」
結局試験時間のほとんどをお喋りに使っていたので、付き合わされたラルゴが大変だとケインは思っていたがそうではなかったらしい。
筆記試験後もラルゴはサララさんと話を続きている。
（あいつ、本当に女性と話すのうまいよな…）
ちょっと羨ましいが、あんな長さの会話は自分には出来そうも無い。

その後、面接があるはずだったけど、ハーティアさんの推薦だからと省略された…ティー君は信頼されているらしい。
それから裏の練習場に出て実技試験を受けた。
「皆出払ってるから私が相手をするね、本当にゴメンね。私、アビリティのメンテも最近してないし、相手にならないかも…。」
そんなことを言いながら、モジモジしているサララはとても可愛い女性だとケインは思った。
しかし、
「ラル、あれなんに見える？」
ラルゴが苦笑いをしながら
「モーニングターだろ…、あのダンジョンで戦ったパペットの右手を思い出すな。」
そう、モーニングターについている鉄球は普通なら握りこぶしくらいの大きさなのだが、サララのそれはボーリングの玉並みの大きさだった…。

ララカルの街にて…冒険者業に就職（6）

地面に寝そべって、ケインはラルゴと空を見上げていた。
「ラル、空は広いな…」
「ああ…ケイン俺はな、海にでてみたいんだ。そしてどこまでもどこまでも遠くへ…」
「…現実逃避しているとあっちの世界にご招待ですわ♪」
2人とも全力で転がってモーニングターの攻撃を回避した。サララさんはモーニングターを自在に操る。起き上がったところで反撃を試みるも2人同時に吹き飛ばすされる。さっきから同じことの繰り返だ。
またもやケインは無様に地面に打ち付けられたが、今度のラルゴは違った。
猫に変身してひらりと着地したのである。
（アビリティを使いこなして来たな。）
そうケインが思ったとき、信じられない速さでサララさんがラルゴ（猫）の元へと向かい拘束した。
「キャ～可愛い！！」
ラルゴはサララさんにキュウと抱き締められ…白目を向いていた。
「一人脱落…かな？」
”キン！”
上空で何かの音がしたので、自分の存在を完全に忘れたように猫をハグするサララから視線を外し上を見上げた。
（空を飛びながら、誰かが戦っている！）
2人の人物が見えた！そのうちの一人が吹き飛ばされてこちらの近くに落ちてくる。
そのままでは地面に激突してしまう、と感じたケインはアビリティを発動して落下点へと走った。
（気を失っている…ヤバイ！間に合うか！）

さらにスピードをあげることをイメージする。
だが、
（ッ！間に合わない！）
ケインが諦め掛けたその時、視界にもう一人の人物が入ってきた。
ケインを追い越しながら目線を合わせて来た。そして、落下する人物をすくい上げる。
またケインと視線を合わせる、その意味をケインは理解した。
（勢いを殺し来れていない！僕がしたに？）
勢いを殺さず落下点に到着、そして、女の子をお姫様抱っこしている女性をお姫様抱っこして、…アビリティで強化した筋力で受け止める。
「ありがとう、少年！。私はアルパカ４０ナイツのアメジストメンバーです！これからもよろしくね！」
なにか、お礼？自己紹介？の仕方に疑問を感じてケインは返答に困ってしまった。

祝！内定…えっいきなり派遣ですか（1）（前書き）

いつも読んでくれてありがとうございます。
感謝感激アメジストです。

祝！内定…えっいきなり派遣ですか（1）

ラルゴ視点のお話です。

ラルゴは軽いめまいを覚えながら、意識を取り戻した。
（…実技試験、終わったのか？）
今いるのは、パーティーハウスの共有フロアでソファに猫の姿で寝転んでいる。
近くでサララさんが見知らぬ女性と話しているのが聞こえた。
「…本当にサララは変わっていないわね、ハーティアさんが気の毒だわ。」
昨日の話でもしているのだろう、意識がはっきりして来たから人間の姿に戻って起き上がる。
「ラルゴ君、起きたのね良かった、ゴメンねちょっと強く抱きしめすぎたみたいで、本当にゴメンね。」
「気にしてないですよ、それよりこの方は？」
話をしていた女性は美人であった。しかも格好が何か普通で無い、歌手のようなきらびやかさが有った。
「彼女はアルパカ４０（フォーティー）ナイツ・アメジストメンバーのシャイナよ、以前私もアルパカのパーティーに入ってた事あるから知り合いなのよ。」
ラルゴ達は、ララカルに来てまだ3日しかたっていないがアルパカ４０ナイツの噂は聞いていた。女性だけの冒険者パーティーハウスでアイドル活動もしていると…。
「アルパカ４０ナイツの話は聞いてます、この街最大級のパーティーなんですよね。でも、アメジストメンバーって？」
「アルパカ４０ナイツのランクよ♪、最高位のルビー、その下にアメジストメンバー、クリスタルメンバー、原石チームって続くの…、ラルゴ君、貴方に出会えたことに感謝！・感謝！これからよろしく

ね！」
（要するにファンになれってことだよな、この人、押しが強いからケインだったならもう勢いでファンクラブに入れさせられてそうだな…）
そこで、ケインのことと試験のことを思い出した。
「その話はまた今度ね、ケインは？あと試験は？」
サララさんに詰め寄る。
「合格よ、あなた達はうちのパーティーに入ってもらうわ。」
…ぐぐっと押し寄せる歓喜を抑えて、
「ありがとうございます。これから宜しくお願いします。ケインは何処ですか？」
「ここだよ…」
疲れた顔をしたケインが荷物を抱えて扉から入って来た。どうやら宿を引き払って来たらしい、ラルゴの荷物もある。
ケインはシャイナさんのところに向かって近づいて行った。
「リリカさんを送って来ました。帰りに目を覚ましたので少しびっくりされましたけど。それでコレなんですか？」
ケインは1枚のカードをシャイナさんに見せて来た。
「…案外しっかりしてるわねあの子、個人ファンクラブのメンバーカードよ。まだパーティーに入ってないから正式なものではないけどね。まあ、貴方もあの子も試験でコテンパンにされてた仲だし、大事にしてあげて。」
「あの子、合格ですか？一応気になるので…。」
少し赤くなっているあたり、ケインはその子に気を持ったのかもしれない…、それともシャイナさんにかな、奥手だから積極的な女性に弱いんだよな、あれ？
「リリカさんて、もしかしてさっき話していたサララさんの妹さん？」
「そうなのよ、私も気になってたの。リリーはどうなの？」
サララさんがシャイナさんに問いかけた。

「…私だけで決められることじゃないけど、飛翔のアビリティをあれだけ使いこなしてたし、今までの経験からなんだけどＯＫになる可能性は高いわ。
でもうち敷居が高いから、確実とは言えないからね。」
少し困っている、正直で、嘘は言えないタイプのようだ。
「あっ、それからこれをアルパカ４０ナイツのルビーって人から預かって来たんだけど。」
ケインが手紙をサララさんに渡す。
封を開けて読むうちにサララさんの顔が真剣なものに変わる。
「ケイン君、ラルゴ君、ファーストミッションよ、しばらくアルパカ４０ナイツのところに行ってもらうわ。」
目をケインに向けると、ケインは物凄い表情になっていた…ラルゴが尊敬する、気合の入ったケインがそこにいた。
（俺も負けてられない！）
ラルゴも拳を握りしめて全力を出す事を心のなかで誓った。

祝！内定…えっいきなり派遣ですか（2）

暗い夜、ついに待っていたモンスターが姿を現した。デビルハンドという、人間でいうと肘から先の部分だけが地面かは生えたような怪物で大きさは３ｍを超える。
ケインは急いで松明に火をつけてデビルハンドの周りの地面に次々と刺して行く。夜なので明かりが必要なのだ。ラルゴはヨモモそうで作られるお香を入れた大きなカゴを持って走り回っている。そのお香の煙でモンスターを包み込みように風向きに注意して、そして声をあげた。
「準備ＯＫです！」
４人の女性が姿を現した。
「「「「アルパカ４０ナイツ・アメジスト！愛ゆえに只今参上！」」」」
全員、煌びやかな衣装に身を包み灯りを反射するような装飾品をつけている。そう、この４人の戦闘を夜でもよく見えるようにする為の裏方を務めるのが今回の２つの依頼内容のうちの１つだ。
アメジストメンバーは全員Ａランクの冒険者で、リーダーをシャイナさんが務める。
シャイナさんが”飛翔”のアビリティで夜空に浮かび上がり戦闘は開始された、上空から戦況を見極め、全員に指示を送るのだそうだ。デビルハンドは形を微妙に変えなが襲いかかる。あんな手に掴まれたらケインならその瞬間アウトだろう。５本の指も針の様に鋭く形を変えながら連続で４人を狙う。
そんな光景を、女性が少し離れたところから見ている。この女性は自分の見たモノを、聞いた音を、遠い場所に送る事ができる。今この光景はララカルにある巨大スクリーンに映し出されているはずだ。モンスター退治をエンターテイメントにするイノベーションは凄いと思う。ただ、最初ケインはあまり気が乗らなかった。

しかし、アルパカ４０ナイツの設立時の話を聞いて気が変わった。
男尊女卑の激しいこの時代、女性の地位向上の為に数人の女性がパーティーを立ち上げた。無力な女性の希望になる様に、差別に打ち勝つ力を得る為に人生と命を捧げた。アイドル活動による人気取りも、この命がけのショーも全ては女性たちの”未来”のため。
４人は派手なアクションを交えながらデビルハンドを追い詰めた。
「「「「４人の心を一つに！未来に輝きを！フォーティナイツ・アメジストスペシャル・ラブアクション！！」」」」
４人お攻撃が決まりモンスターは霧散する…（？）
体にきしむ様な痛みが走った…、思わず跪く。
４人の冒険者は整列して女性に手を振っていたが、女性が手を上げて終わりを教えるとその場にへたり込んだ。
ただ、シャイナさんがこちらに声をかける。
「少年達！その場で横になってじっとしていなさい。高レベルモンスターを倒した事で大量のＳＣＭを浴びたからあなた達ではきついはずよ。」
ラルゴも座り込んでいる。ケインはゆっくり仰向けに転がり空を見上げた。
（本当の強さって行ったいなんなんだろう。僕は強くなったら何にその力を使うのだろう。）
…体の痛みではなく、心の痛みを感じた。今夜は眠れないかもしれないとケインは思った…。

祝！　内定…えっいきなり派遣ですか（3）

コンサート？の翌日、ケイン達はある湖を目指して川辺を川上に向かって歩いていた。
デビルハンドの出現した場所と近かったので２つ一緒に依頼された仕事である。
「ホントは原石チームが担当する仕事でね、よその男の子に依頼しない仕事なんだけどね、大規模なモンスターの討伐があるかもしれないってことで皆待機なのよね、私は正式メンバーに選ばれてのファーストミッションだから来たのよね。」
喋っているのは、リリカちゃん、サララさんの妹で白銀の髪をしている１４歳で，，飛翔”のアビリティ持ちだ。今度アルパカ４０ナイツの正式メンバー（原石チーム）に選ばれたばかりの女の子だ。
ケインは彼女に会った事があった。彼女が採用試験中に墜落して意識を失った時、彼女のパーティーハウスまで背負って送って行ったからだ。
今回は彼女を含め３人でこなす仕事である。
内容は湖にいるキラキラ貝の採取で難易度は低い。ただし、湖にはキラキラ蟹というキラキラ貝を身につける習性のあるオシャレな蟹型モンスターが襲ってくる事があるので注意が必要だ。
この貝は、見た目が綺麗だが、宝飾品としては長持ちしないので市場ではあまり人気がなくお店には出回っていないらしい。しかし、戦闘をこなすため、激しく動くため、長持ちしないアルパカ４０ナイツの衣装につけるにはうってつけであるとの事。
「それにしてもハーティアさんが来てくれなかったのは残念だなあ。」
ラルゴが本当に残念そうに言う。ハーティアさんは自分達がファーストミッションをこなすまで一緒に行動してくれると言っていたが、急遽仕事が入ったとのことでアルパカ４０ナイツと行動をともにす

る前に別れていた。
「ハーティア兄さんがいてくれるととっても安心だったわよね。」
そう言えば、ハーティアさんはサララさんとずいぶん前から付き合いっているらしく、年の離れたリリカちゃんは兄の様にしたっていると言う。
「まあ、いろいろと教えてもらって成長したし、今回のミッションは自分達の力でなんとかしよう。」
ケインの言葉にラルゴはニヤリとした笑みを返した。ケインが自分のアビリティを実践で使ってみたがっているのを知っていたからだ。それ以上に今の自分が”自分の力”、”自分の強さ”にこだわっているのを言葉にせずとも彼はわかってくれている。
「もうすぐ着くはずよね、急ぎましょう！」
リリカちゃんは飛んで行こうとしたので慌てて後を追う。

祝！内定…えっいきなり出向ですか（４）

地元の人達から、キラキラ湖と呼ばれるその湖にケインは到着した。波打ち際の砂浜がキラキラ輝いているのは、キラキラ貝のかけらが含まれているからだろうか。湖は半径２００ｍ程だろう、それほど大きいわけでもないから深いところは少ないかもしれない。
湖の上を一周リリカが偵察をして帰ってきた。
「中でキラキラしたのが動いているの！ヤッパリね、先輩が言ったとおりにね、かなりの数のキラキラし蟹がいるわね。」
出来れば会いたくないが、好物？の貝を掘っているのを見られたら襲ってくるのは確実だろう。
「私ね、上から見張ってるね。貝はよろしくね！」
そう言うと、リリカちゃんは浮かび上がりケイン達の頭上を旋回しはじめた。
「やるか！」
そう言ってラルゴがミニ熊手を持って砂浜を引っ掻く。どうやらこの辺りの砂浜が一番大きくて掘りやすそうだ。ケインもラルゴに続いて砂浜をひっかく様に掘り始めた。
…しばらく掘ってソコソコの量の貝を集められた。ただ腰が痛くなってきたので伸びをした。上空ではリリカがダンスの練習をしていた。
空中で舞い踊るその姿はキラキラと輝きとても綺麗で、リリカちゃんの魅力を存分に発揮させていた。
（あの衣装もキラキラ貝だよな、素敵だけど…何か引っかかる…なんだろ？）
ダンスをしていたリリカちゃんがいきなり大声をあげた！
「きゃあ！蟹さんが集まって来てる！」
波打ち際の水面が盛り上がり、大量の蟹がキラキラしながらこちらに向かって来た。

（キラキラが好きなんだから、あの衣装をみればくるよ…なんでもっと早くに思いつかなかったんだ！）
「きっとあいつらアルパカ４０ナイツのファンだぜ！」
ラルゴの冗談を聞いて笑えないけどありそうとケインが思ったとき、
「じゃあ、攻撃できない？」
とリリカちゃんがファン思いな言葉を発した。
「…ファンじゃないから、ゼッタイ。」
自分でも間が抜けているとしか思えない言葉を、ケインは疲れたようにつぶやいた。

祝！内定…えっいきなり派遣ですか（5）

ケインとラルゴは、大量の蟹型モンスター・キラキラ蟹から逃げるため砂浜から離れ、近くの林の中に身を潜めた。キラキラ蟹はケイン達を追ってくると思ったが、砂浜で塊り頭上のリリカちゃんに向けてハサミを振っている。

「本当に、リリカちゃんを見に来たファンみたいだな。」

ラルゴのつぶやきに、ラルゴはハッとなった。

（そうだ、リリカちゃんを見て集まって来たんだから！）

「リリカちゃん！歌って踊りながら向こう岸まで飛んで行って！」

ケインの言葉の意味を了解したことを伝えるためか、リリカちゃんは両手で丸を作った。「みんな～？今日はありがとう？私の初ステージ！リリカ、みんなのためにラブパワー全力で頑張ります！」

よく通る声でファン？に挨拶をし、先程ケインが見た舞をセリフ付きで踊り出す。

「…ジェンダー、ジェンダー、あなたの心に届いてー。私は女の子なのー！それは私の誇りなのー…」

ゆっくりと湖に向かって行く。キラキラ蟹達はそれを追いかける様に湖に戻って行った。

ただし、1匹だけ砂浜に残った蟹がいた。一番大きく立派で硬そうな甲羅をしている。右手は大きなハサミ、左手は小さなハサミをしている。

なんと、その小さいほうのハサミで2人で集めたキラキラ貝を器用に甲羅に付けているではないか。

「ケイン、あれじゃ今日の収穫はなくなっちまう。奪い返そうぜ！」

ラルゴは戦闘準備を始めた。アルパカ40ナイツのアメジストメンバーは今日帰ったが道具係の馬車が待ってくれている。それでも明日には出発する予定なので今日貝を集めて持って帰らなければミッションは失敗したことになる。

「絶対に持って帰ろう。２人とも無事で。」
後半の言葉は自分に言い聞かせるようにつぶやき、ケインも用意を始めた。

祝！内定…えっいきなり派遣ですか（５）（後書き）

誤解を招かないようにするためにこの文章を書きます。
私はジェンダーのことは専門家ではありません。
パーティーハウスのアルパカ４０ナイツが設立された理由を女性の地位向上としているため、啓発活動として歌詞に織り込んでいるという設定です。

祝！内定…えっいきなり派遣ですか（6）（前書き）

いつも読んでいただいて本当にありがとうございます。
勢いでガンガン書く分、誤字脱字、変な言い回し、設定のミスなど、
多々あると思いまが、ご容赦ください。

祝！内定…えっいきなり派遣ですか（6）

キラキラ蟹は強かった！ケインとラルゴの2人がかりでも余裕を見せている。
（砂地がこんなに戦いづらいなんて！）
しかも時々吹き出してくる泡はぶつかって弾けるときに強い衝撃を発生させる。ラルゴは犬の姿で移動して攻撃だけ人間に戻るというパターンを繰り返している。二本足の自分が一番動きが鈍い。なんとか林のほうにおびき寄せようとするが、キラキラ蟹は浜辺に集めたキラキラ貝から離れない。
「ケイン！俺が注意を引くから一発大きなのをかましてやれ！」
了承の合図をラルゴに返してケインは意識を集中した、
（アビリティ発動、僕はとっても力持ち！）
先日、アビリティのリライトを行いわかったことは”ブースト（身体強化）”の筋力強化に対する発動効率が１０％ほどだったということだ…つまり、スピードは上がっていたが筋力はほとんど上がっていなかったのだ。筋力がアップしたのと今の2人の武器・鉄の棒（金銭的にまだ剣は買えなかったが、木の棍棒より攻撃力が高い）で破壊力は飛躍的にアップしている。
鉄棒を振りかぶったままジリジリと砂をしっかり踏みしめながら回り込む。ラルゴが犬の姿で正面から気を引いてくれている。キラキラ蟹がラルゴを挟もうと大きなハサミを繰り出したタイミングで一気に跳躍し振り下ろす！
っと動きを見られていたのか小さいほうのハサミをいきなり突き出されたが、腰の小袋を切られるものの直撃を回避して渾身の一撃を甲羅に叩きつけた。
（…シビレる～。）
あまりに硬かったため衝撃で鉄棒を落としてしまった。甲羅は全く傷ついていない。

「逃げろ！」
ラルゴの必死の叫び声が聞こえたがキラキラ蟹は目の前、…動けない。
だが、キラキラ蟹はケインには目もくれず砂浜に落ちたカードを小さいハサミで拾う。
やがて、どこか嬉しそうに体を震わせて湖の中に戻って行った。
「…なにを取られたんだ？」
ラルゴが不思議そうに聞いてきた。
「…リリカちゃんの個人ファンクラブの会員カードを…。」
確かにあのカードはやたらキラキラとデコって有ったので…まさかとは思うが…。
（本当にファン？）
確かめる術もなく、する気にもなれず、…この疑問は一生解けないなと思った。

祝！内定…えっいきなり派遣ですか（6）（後書き）

実はあのキラキラ蟹はかなり高レベルなモンスターでまとも戦ったら勝てません。

ハーティア上司（前書き）

「いつも読んでいただいて、感謝！感謝！
今回のオープニングはアルパ４０カナイツ・アメジストメンバーのシャイナが担当します。
今回の話はすずらん亭の看板娘サララの元彼で今彼に戻ったハーティアのお話です！」

ハーティア上司

ハーティアが語るお話です。

コンコンと扉をノックして、若手の職員は入室することを知らせ紅茶を載せたトレイをハーティアの上司の執務室に運び込む。
ハーティアの上司が紅茶好きなのは、皆に知られている。最もそれは自分が入室しやすくするためだ。
栗色の髪の上司は、目立たないタイプの中年男だ。ハーティアは上司の肩を軽く叩き、忍び込んだことを知らせる。
上司は、若手職員が退室した後、秘書官を用事言い付けて退室させる。

「ご苦労だったな、追加の仕事までさせてしまって。」
「お気になさらず…、3件報告があります。」
秘書官が帰ってくるまでなので、ハーティアは早速話し始めた。
「例のマルチアビリティの2人は予定どおり、誘導できました。今はすずらん亭にいます。ただし、問題がありました。」
「紋様がらみか？」
「はい、すずらん亭の冒険者の面倒をみている紋様術師は決して能力の低いほうでは無いのですが、ケインの方の紋様を描くことができませんでした。結局、もう一つの仕事のため同行してもらっていたタチアナ女史に描いてもらいました、内密にですが…。相手の紋様術師も長老には報告しないと言っていました。」
「当然だろうな、自分が無能だと報告するようなものだ。」
この王国の紋様術師は長老という各紋様術一門のトップが集まって成り立っている。今回の研究サンプル（ケイン達のこと）を獲得したのはフーバー老師で、話にでてきた紋様術師はその門下生に当たる。
「トランス状態にして行ったのでケインは気づいていませんがね、

後、ケイン達のファーストミッションは直接見れませんでしたのですずらん亭いる既知に報告書を頼んでおきました、こちらです。」
報告書をみたとき、上司の目元が少し下がったのをハーティアは見なかったことにしてあげた。
「…苦労を…コホン、君には苦労をかけるな、いつも、いやまったく。」
会話を変えるため、ハーティアは次の話をした。
「…ええ、そう言えば少し気になることがあります。アルパカ４０ナイツの介入を受けたのですが。」
「それについては、君に連絡できていなくて済まない。紋様術師達の方でフーバー老師が２人とも独占するのはズルいという話が出ていてな、結局リシェル老師が１人受け持つことになった。」
「…それは、…ルビーの指図でしょうか？」
「おそらくな、リシェルはルビーの紋様術の師匠ではあるが、ルビーの崇拝者だ。先日の査問会のことも当然話していたはずだ。」
当然これからはもっと介入があるであろう、すずらん亭はハーティアにとってかけがえの無い人がいる場所で最も信頼のおける場所なので２人を連れて行ったのだが。ルビーが相手では一筋縄では行かない。これは少し本気で調べる必要があると、彼の直感が告げていた。
「…次ですが、例のモンスターの封印は無事に終了しました。タチアナ女史が予想以上の実力の持ち主で助かりました、若手最高の実力者と最長老が薦めるだけあります。」
「丁度、貸しができたところだったからな。いい取引だったな。」
「…はい。最後の報告ですが…」
秘書官の気配が近づいてきたことを感じて、小声で早口に説明した。
秘書官が入って来たところで、するりと外に出る。
「アチャチャ！」
後ろから、悲鳴が聞こえた。
（猫舌なんだよな…あの人）

結構時間が立っているはずだからかなりぬるいんじゃない？と心の中で突っ込みながらその場を去った。

ハーティア上司（後書き）

ハーティア上司はいったい誰か伝わりましたでしょうか？

ケインとラルゴのわかれ道（前書き）

いつも、感謝・感謝です。

ケインとラルゴのわかれ道

地面に寝そべって、ケインはラルゴと空を見上げていた。
「ラル、空は広いな…」
「ああ…ケイン俺はな、夕日をみていると走りたくなるんだ。どこまでもどこまでも夕日に向かって…」
「…イケナイ子達に、オホシ様をプレゼント♪いつもより多く降らせています♪」
先日の試験と似た、デジャヴ感のようなものを感じながら吹き飛ばされた。
（1つでもかわせなかったモーニングスターが4つも飛んで来たらかわせる訳ないじゃん！）
サララさんは先日のモーニングスターより一回り小さいが、2つの鉄球を付けたモーニングスターを両手に持って自在に攻撃して来た。
一度にクレーターが4つ出来る。
今日はパーティーハウスの裏の練習場で朝からずっとサララさんの特訓受けていた。
「冒険者が相手の実力を見誤ったら、お終いよ！そう、あなた達もう死んでいるのよ！」
サララさんはファーストミッションでキラキラ蟹と戦ったことをひどく怒っていた。
「格上と戦わなければならないときは、必ずあるわ。でも、もっと考えて！あなた達が死んだら悲しむ人がいることを！」
「…荒れているな～。サララ。」
不意に横手から声がかかった。
「ルーク！お帰りなさい。早かったのね！今支度を…」
「せっかくだから、俺も混ぜてくれよ。」
金髪イケメンのルークと呼ばれた男は、軽く叩き首をこきこきと鳴らしながら練習場に降りて来た。

「始めまして、後輩君達。俺はルーク。自己紹介はサララとのウォーミングアップをしながらするよ。」
そう言うと、ゴリラに変身した。
「”アニマルチェンジ”！」
ラルゴが驚いたような声を上げる。
少し離れたところに2人で移動してサララの繰り出すモーニングスターを軽く弾き返しながら、
「鳥に変身して、他のみんなより先に帰って来たんだ。ラルゴ君、キミは僕と同じアビリティだよね？」
「…喋っている！」
ケインは思わず声にだしてしまった。
「修行を積めば動物のままでもしゃべれるのさ、　…参考にしてくれ。じゃあ行くよ！」
そう言うと、今度は黒ヒョウに変身して一気にサララさんに襲いかかる！サララさんは雨のようにモーニングスターを繰り出して距離を稼ぐ。すると今度はカラスに変身して上空に舞い上がり旋回する。
「黒ばっか…、意図的？。」
ケインがつぶやいた瞬間、今度は鮮やかな体色のカワセミに変身してサララの胸にクチバシを突き刺したように見えたが、そこにはサララをお姫様抱っこしたルークがいた。
「ゴメンなさいね、せっかく最後はわかりやすい攻撃にしてくれたのに。練習相手にもなれない…」
「その目ではしょうがないよ、おっとこんなことしてるとハーティアに怒られるな。」
サララを優しく下ろす。サララさんはモンスターの毒で左目の視力がほとんどないらしく、そのせいで冒険者を引退したのでそうだ。
そのとき、ケインの横にいたラルゴがルークのもとに突進した。そして正座して、
「師匠！弟子にしてください！」
炎のように燃えた瞳をルークに向けてラルゴは大声で叫んだ。

小さな依頼（前書き）

ヒロイン登場です。

小さな依頼

天気が良いその日、ケインはサララさんから依頼された洗濯物を干しを終えてからハウスの共有フロアに向かいカウンターに座った。サララさんはもういない。用事を済ませるために出かけたのだ、遅くなるらしい。

今、ルークのチームはラルゴを連れて依頼をこなしに旅立っていない。ケインはサララさんと二人きりで留守番である。

カウンターには課題が置いてあり、サララさんが戻って来る前に終えなければならなかった。

「…ええと、戦っている最中、依頼人が別のモンスターに襲われました。あなたならどうします…、か。」読みあげながら、頭をひねる。

コンコン、と扉を叩く音が響いたので玄関に行き扉を開ける。

そこには、ケインより1、2歳年下と思われる女の子が立っていた。

「あなたは、冒険者ですか？」

「はい、新米ですが。」

「よかった、あなたに相談…依頼があるのですがお願いします。」

ぺこりと頭を下げてくる。

「…今、担当の者が出払っておりましてその後ではいけませんか？」

正直ケインは焦った、以来の受け方も知らないのだから。

「あなたに、です。話だけでも聞いてください。」

その勢いに押されて、なかに通してしまった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

結局、話を聞いてケインは依頼を受けた。今、2人で移動している。

パーティーハウスにはサララさんに当てた手紙をおいて来た。

内容は、紛失物の探索依頼だった。大事な預かり物のネックレスを

紛失してしまったそうで、今向かっている草原で落としたのはほぼ間違いないのだと言う。ただ、そのもの自体の価値は低く、彼女（マリアと名乗った）もお金はそんなに持っていなかったらしく他では断られたらしい。

「今日中でないといけないので、ゴメンなさい…。」

「僕に謝る必要はないよ…。」

ケインも最初断ろうとしたが、”謝れば許してくれる人です。でも、見つけられる可能性が少しでもあるなら、私はそれをお全力でしたいのです。”と言ったときの瞳に強い意思を感じた。心が動かされた、この人を今日は見ていたい思った。その為にサララさんに怒られてもいいと…ちょっと思った。

指定した場所に着くのは多少時間がかかった。本来馬車でいくべき距離なのであるが、時間もお金も無いので、身体強化してお姫様抱っこして走った。最初怖がっていたが、スピード感が気に入ったのか途中から喜んでいた。

「じゃあ、落としたときの行動を教えて。まず、その範囲を探してみよう。」

「はい、…ええと。」

2人で歩き捜して回る。昼頃になっても見つからな方のでお弁当を食べた。サララさんが作ってくれていたサンドイッチを持って来たのだが、2人で半分こした。マリアは随分喜んで味わいながら食べていた、きっとお腹が減っていたからだろう。小鳥の鳴き声がよく響き渡る、一心不乱に探したからか、心が気持ちよかった。このところ、ケインは気分が良くなかった。ラルゴと離れたこともそうだが、この先自分がどうしたいのか、イマイチわからなくなっていたのだ。探し物一つに全力を尽くすこの娘の姿が羨ましいと思っている。

「ありがとう、すっごく美味しかったわ！」

笑顔でマリアはお礼を言って来た。作ったのはハウスの人だからと返事を返して、また探し物に戻った。

その後、範囲を広げて探すものの見つからなかった。
「…時間だわ、…終わりにしましょう。」
マリアが時計を見ながら終わることを伝えて来た。
「もうすこし、いいけど？」
帰る時間が遅くなるからあまり進められないが、一応聞いて見た。
「いえ、この時間までと、決めていたから。気を使ってくれてありがとう。」
それから草原を抜けて道に出たあたりで、さりげなくマリアを見た。唇を噛んでいるが瞳は後悔していないと語っているようだった。
「私なんかの、こんな小さな依頼の為に一日付き合ってくれて、本当にありがとう。本当に本当に感謝しているわ。」まっすぐ自分の目を見つめながら語る彼女に胸がドキッとした。知らず、一歩下がる。
（？）
靴の裏に違和感を感じ、足をどけてみると何かあった。
「それ！」
マリアが急いで拾い上げる。
「すごい、見つかった！」
ありがとう！と何度も繰り返す彼女に、照れながら運がよかったねというのが精一杯だった。
帰りもまたお姫様抱っこだったが、疲れていたのかすぐマリアは寝てしまった。おかげでドキドキしているのに気づかれないで良かったとケインは思いながら時々彼女のかをお見つめた。
昨日までのつまらない気分が吹き飛んでいた。ケインの心は炭火のようなじんわりとした暖かさに包まれている。今日は、とても疲れたが大きな収穫を得た。
「ありがとう、マリア。」
心から彼女に、…落し物をしたことに感謝した。

両手に花で初クエスト（1）（前書き）

遅れてすいません。

両手に花で初クエスト（1）

カタコト、カタコト…馬車の揺れが眠りを誘うのにあがらながら集中力を維持する。
今は、依頼人の荷馬車に乗って移動しながらアビリティの修行中である。街の近郊にある村からの依頼で討伐系のクエストである…ｚｚ。
「寝るな！」
と隣の人物に手加減なしで叩かれた。
「…すいません。」
まずは謝る。これが大事だとここまでの道中で学習した。
「誠意の無い謝罪などいらん…、全く鍛えがいのない弟子だ、ラルゴは剣もアビリティも筋が良かった上に礼儀を知っていたぞ。」
…ナゼ？を心の中で繰り返す。
今隣にいるのは2人。1人はサララさん、これはいい。今回の依頼は冒険者ギルドから取得したギルドクエストだ。因みに先日マリアから直接引き受けた仕事はハウスクエストというそうだ。僕の為に軽めの依頼をサララさんが請け負ってくれて、2人で行く予定であった。
だが、なぜかもう1人、ここにいるはずのない人物がいる。紋様術師のタチアナさんだ。
「アビリティは集中力が大事だ。せっかくわかりやすい私が紋様を描いてアビリティが安定したのだから今度は持続的に発動できなくてはいけないのだ。」
「…えっとこの前、他の人に紋様を描いてもらったから師匠が描いたんじゃないですよ。」
一応呼び方は”タチアナさん”、ではなく”師匠”にしてある。
タチアナさんは一瞬狼狽えてから、
「き、昨日メンテナンスしたではないか！だからもう私が描いたよ

うなものだ！そんなことよりもっと集中！」
と黙らされてしまった。
サラさんは修行の邪魔になるからとずっと静かにしている。
両手に花といえば聞こえはいいが…、ケインは昨日のことを思い出していた…。

ーーーーーーーーーーーーーーー

パーティーハウスの共有フロアでサラさんから今回の依頼のレクチャーを受けていたとき、コンコン、とドアをノックする音が聞こえた。
ケインが玄関の扉を開けて…すぐに閉めた。
「誰？」サラさんが聞いてきた。
「誰もいなです…目の錯覚だから気にしないでくだ、あば！」
蹴飛ばされて開いた扉に吹き飛ばされて奇声をあげてしまった。
「…元師匠を目の錯覚と言うとは…教育が足りていなかったか？」
「アルパカ４０ナイツ？」
そこには、あり得ない格好のタチアナさんが立っていた。
「あなたが、サラさんですね。私は紋様術師のタチアナと申します。王都でこの者の師匠をしておりました。まずはこの紹介状を。」
「タチアナさんは絶世の美女ですが、天変地異があろうとこんな格好はしません！ニセ者です！」
「今の発言、前半は事実だが後半は違う、私に似合わない服はない！」
「会話がずれてません？それと…私からいうのもなんだけど…本当にうちに入りたいの？」
サラさんは渡された手紙を読んでから、タチアナさんに少し不思議そうに問いかけた。
「フム、では説明しよう。紋様術師のギルドの老いぼれ達が私から仕事を取り上げたのだ、それも裏から卑怯な手で。故に王都で稼げ

なくなりこちらで、紋様術以外で研究資金をかせがねばならなくなったのだ。同じ女性という事で、リシェル老師が助け舟を出してくれてな。」
「そう言えば、アルパカ４０ナイツのルビーさんはリシェル老師のお弟子さんでしたね。」
「そう、それでアルパパ４０ナんとかの原石チームとやらにいれてもらったのだが…。
そのもの達が私の事を心配してくれてな、まずは冒険者のイロハをという事で、こちらを紹介してもらった。」
それは追い出されたんじゃない？とは口が裂けても言えないなとケインは思った。
「まあ、いいですよ。紋様術師なら紋様陣を使えるでしょうから。」
「えっ？えっ？試験は？モーニングスター（実技試験）は？」
「うちは大きなパーティーハウスじゃないから試験はないのよ、ティー君がやれって言うから。雰囲気を楽しませたいっていってたけど、からかってただけよ♪」
「な～？」
信じられない事があまりにもありすぎて。倒れてしまったケインであった。

両手に花で初クエスト（2）（前書き）

感謝・感謝です。
今回は戦闘があります。
表現は控えましたが好きでない人は飛ばしてください。
初シリアスです。

両手に花で初クエスト（2）

ケイン達3人は、依頼のあった村に無事到着した。そして、依頼内容の確認作業に入る。

「…では、状況はかなり変わってきてますね。」

サララさんが村の代表の若者と打ち合わせをしていたので、ケインは同席した。何事も経験である。

「はい、ですので依頼の内容を変更させてください。お願いします。」

若者は素直に頭を下げている。

「ここまで内容が変わると受ける事は…、ではまず、現状の確認をさせていただきます。受けるかどうかはその後にさせていただきます。」

キッパリとした言い方なので相手に意思がはっきり伝わる、サララさんは流石だなとケインは思った。

出来もしない仕事をうけられると期待させてはいけないのだ。

内容は、始めスキンヘッド猪の討伐だった。つがいが作物を荒らしてしまうらしい。大きすぎて手が出せないとの事で、冒険者にいらいすることにした。だが、その依頼を出している最中に、大鬼（オーガ）があらわれたのだ。初心者の冒険者では荷が重い。サララさんの実力なら視力に不安はあるが大丈夫であるだろう。だが予定外の事態には慎重になるべきだと伝えてきてた。ケインもそう思う。スキンヘッド猪でも決して容易な相手ではないのだから。オーガは何人もの村人が見かけ、1人は捕まって食べられそうになったらしい。その上、1人木こりの若者が行方不明になっているという。

その話の後、ケインは畑に向かった。

確かに、ひどく荒らされている。ケインは農村出身なのでコレがスキンヘッド猪の荒らした仕業だとすぐわかる。…しかし、大きな足跡も見つけた。

（…オーガが畑に？人を襲う為？）
よく見ると、キュウリやトマトが引きちぎられている。高さ的に猪ではない。さらによく調べて見ると、大根と人参が引き抜かれて持ち去られている…これもスキンヘッド猪ではありえない。
「ここに来た、オーガはベジタリアンなのかな？」
調べた事をサララさんとタチアナ師匠に伝えてから、自分の意見を言う。
「そんなわけがあるわけなかろう、第一1人食されているではないか。」
「そっちの可能性が高いけど、…生きている可能性もあるわ。私は受けようと思うけどケイン君の意見を聞かせて。」
決定権はリーダーのサララさんにあるが、今回のクエストはケインの修行用である。
（…これは、試されている？）
「受けるべきだと思います。今回の依頼の優先順位は人命救助、本来の依頼のスキンヘッド猪の討伐、オーガ退治の順にするべきです。」
サララさんは上出来と言って頭を撫でてくれた。年下扱いは遠慮願いたい、師匠も真似すんな！
結局依頼を受けて、夜待っていると、スキンヘッド猪が2匹現れた。言われていたとおり大きい。
「ケイン君、後方に回り込んで1匹お願いね。後、わたしだと逃げられてしまう恐れがあるから、そのときは無理しない程度に追いかけてね、本当に無理しないでね。」
了解の意思を伝えてから飛び出す。月明かりで比較的戦いやすい。サララさんは目が悪いので、近くに師匠が松明を持って待機している（まだ火を付けていないが）。
ケインの動きに1匹が頭を向けた。畑は足場が悪いので林の近くで構える。武器の短剣はまだ抜いていない。突進してくるスキンヘッド猪を静かに見つめた。

（命がけ、生きるために僕を殺そうとして向かって来ているのがわかる、必殺の意思が瞳にこもっているね…。僕も、サララさんも、村人の命のために、必殺の決意です…あなたの命をいただきます。）
アビリティを発動していたせいか、異様に時間が長く感じられた。スローモーションの世界でスキンヘッド猪の、額から突き出たスキンヘッド部に両手を当て横に押す。スキンヘッド猪は全体重をかけた突撃の勢いが首にかかり骨が折れた手応えがあった。自分が今、1つの命の灯火を消した事を全身で感じた。
その後、サララさんお方も無事倒した。
「猪の解体は村人に任せましょう、あと見張りもお願いして、私達は明日に備えましょう。明日は早朝から行方不明者の探索に行きます。」
「了解した。」
「はい。」
自分の声が思ったよりもかすれていて自分でびっくりした。
その夜、当てがわれた村長の部屋に3人で寝た。1人で寝ると言ったのだが、2人が強引に一緒に寝ると行って布団を持って来た。
（両手に花でラルゴにうらやましがれるな。）
そう思いながらケインは布団を頭からかぶって、…震えが止まらない自分の身体を只々抱きしめていた。

両手に花で初クエスト（3）

ケインはサララさんとタチアナ師匠とともに、天然の洞窟の前にいた。オーガの足跡をたどって山の中を歩いて行くと、以外と簡単にたどり着いた。オーガの足跡はわかりやすい上に引きずったようなあともあり追跡はたやすかった。
明かりを用意して洞窟にはいるとそこにはオーガがいた。こちらを見つめながら横になっている。体長が３m近くあるその姿は恐ろしいものだが、肋骨が浮き出ており弱っているのが伺えた。足に木を添えてツタでグルグル巻にしてある。周りには食べ物が散乱していた。
「足を怪我して弱っている見たいね。でもケイン君情けは禁物よ。」
サララさんが武器を構えて近づく。オーガは諦めたように目を瞑り横たわった。目から涙を流している。
（情に流されるな…、冷静になれ！）
ケインには何かが引っかかっていた。かわいそうだから？違う。悪さは何をした。畑を荒らして、人を1人…。畑？本当に木こりを殺したのか？周りを見回した。キュウリ、トマト、大根、人参…
（生で食べれるものばかり、…まさか！）
「…あなたは、行方不明の木こりさんですか？」
洞窟内では音がとても響く。小声ではあったが、オーガの耳に届いたようで、驚いたように上体を起こし、なども頷いた。
何かを伝えようと喋るが、牙が多い口のせいか言葉にならない。
「あなたは、うまく喋れなくなった、そして、文字もかけない？そうでしすね？」
泣きながら何度も何度も頷いた。
「そんな事があるのかしら？」
サララさんは驚いていたが警戒を解いていないらしく、武器をおろしてはいない。

「師匠、何か心当たりはありませんか？」
「…一つだけある。”禁忌”触れたのだろう。」
師匠は少し自信なさげにつぶやいた。

両手に花で初クエスト（4）

「禁忌、ですか？」
ケインは聞き慣れない言葉だったのでタチアナ師匠に質問をした。
「可能性が高い、というだけで確定できん。」
タチアナさんは三歩オーガに近づき、
「何時に質問をする。首を降って答えよ。」
オーガの木こりさん（仮）は頭を縦に降った。
「なんじは、神の祝福を受けて、アビリティを使えるようになった。」
コクリと縦に降った。
「汝のアビリティは動物などに変身することができるものであった。」
また、コクリと縦に降った。
「汝はそれを誰にも言わなかった。つまり王都へ行くのを嫌がった。そうだな。」
少し横を向いて、ばつが悪そうに首を縦に降った。
「隠れていろいろ変身していたのだろう。しかし、オーガに化けてたら元に戻れなくなった、それで困ってこんなことになっているというところか。」
オーガの木こりさんは泣きながら首を縦に何度も振る。
「確定だな、”非自然体への変化による禁忌抵触”の状態だ。」
タチアナ師匠は今度は自信を持って言い切った。

両手に花で初クエスト（5）（前書き）

お気に入り登録してくださった方々…、読んでくださった方々…、
作者は感謝・感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

両手に花で初クエスト（5）

タチアナ師匠の説明は続く。
「アビリティとは、神や精霊などの祝福、送られたプレゼントだ、自分の力ではない。あくまで大いなる存在から力をもらっているに過ぎぬ。
アビリティはときどき使えなくなるものがいる。それはその神の怒りに”禁忌”に触れたからだと言われている。
アニマルチェンジの場合、モンスターに姿を変えたときがそれだ。いくつか報告例がある。モンスターは魔神が作り出した眷属だからという説がある。王都に行けばいずれかの紋様術師に説明されていたはずだ。」
つまり、隠していたために知らなくてはならない危険を知らず、使い方を誤ったということか。
「”禁忌”に触れた為に、神の怒りに触れた為にアビリティを取り上げられたのだ。そのままの姿でいるしかあるまい。」
オーガの木こりさんが泣きながら声を上げる。
「なんとかならないのですか？」
「姿の戻し方など知るわけがなかろう。」
「…でも、師匠ならなんとかなるでしょ？」
うっ、とタチアナ師匠は少し呻いた。
「まあ、うむ、調べて見ないことには。」
「流石ですね、絶背の美女で、天才紋様術師なんて師匠しかいません！」
「あっ、当たり前のことを言うな。おまえ、絶対動くなよ！」
タチアナさんはオーガの身体を観察し始めた。ときどき手をかざしてブツブツと呪文を唱えている…。
「…欠損している、…いや、うむ…、これは…、従来の説を覆せるかもしれん…。」

そして、オーガの木こりさんの顔をみながらタチアナさんはまるで断罪の審判官のように冷たく言い放った。
「もしかしたら元の姿に戻れるかもしれぬ、だがかなりの痛みを伴うぞ。しかも失敗して死ぬ確率の方が大きい。…どうするか選ぶがいい。我が紋様術、受けてみるか？」
しばしの間をおいて、オーガの木こりさんは頷いた。
タチアナさんは筆を取り出してオーガの身体に紋様を描く。
「アビリティを活性化してその力を使い切らせる。それまで身体が持つか運次第だ。」
アビリティに反応してか紋様が浮かび上がる。オーガの木こりさんが泣きながら、悲鳴をあげ、転がり回る。
「私は、外を見てるね。」
そういってサララさんは洞窟を出ていった。
ケインはタチアナ師匠と共に成り行きを見守る。
３０分ぐらいした頃だろうか。痛みに失神して、ピクピクと痙攣していたオーガの身体が歪み始めた。ゆっくりと人間の姿を取る。
タチアナ師匠が息を確かめた、なんとか大丈夫のようだ。
「バカ弟子よ、アビリティは諸刃の剣だ…。覚えておけ。」
言い方は冷たいが、師匠の声になぜか優しさを感じるケインであった。

両手に花で初クエスト（6）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

両手に花で初クエスト（6）

サララさんが語ります。

（フニフェリャ～♪）

サララはヘロヘロになってフラフラしていたところへ彼が現れたので寄りかかった。

「こんな無茶をするなんて、あなたらしくもない。」

そういいながら彼は私を横たえて膝枕をしてくれた。

（シ・フ・クの時間♪）

「いつもなら3人で迎え撃つところでしょう。ただでさえ…」

彼をかばって毒を受け、左眼の視力をなくしたのだ。そのことを彼は誰よりも気にしている。

「本格的に復帰するには辛いかな～。」

「するつもりですか？」

「私もヤッパリ冒険者だもの♪、まあ復帰は取りあえず、ケイン君達の初心者マークが取れるくらいまでかな？ハウスのこともあるし。」

「ケイン君達を気に入ってくれたみたいでよかったですよ。」

「ケイン君は、あれね、戦いになるとスイッチはいるタイプね。それでいて昨夜は震えていたの、カワイイよね♪」

「そうですか。」

少し嫉妬が入ってる♪あなたもカワイイ♪と思いながら、

「そうね、できれば彼みたいな子供が欲しいの♪」

思った以上に、とってもとっても動揺してくれた。

（カワイイ♪）

「…ケイン君が来ますね。」

彼の膝から頭をどかし自分の腕をまくらにして目を瞑る。

彼が姿を消すのを見るのは好きではない。

「サララさん！」
ケイン君が驚きの声をあげて駆け寄ってくる。
「怪我を、まさかオーガ？」
「このくらい大丈夫よ。あのね、アニマルチェンジは対象をよく知っているか見てないとダメってルークがいってたの。つまりこの辺に本物のオーガがいるかしらって当てを付けたの。仲間（？）の悲鳴を聞いたら来るんじゃないかな～って思ったら当たったわ。」
「どうして呼んでくれなかったんですか！」
「今のケイン君にはアビリティの知識を強化する方が戦闘経験より重要よ。」
納得のいかない顔のケイン君に、
「それより安心しないで、周りを調べて。オーガが1匹だけとは限らないもの。ハウスに帰るまで油断は大敵よ♪」
と言ったら、全力で警戒を始めた。
本当にカワイイと思いながら、サララは意識を開放した…。

両手に花で初クエスト（6）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

両手に花で初クエスト（6）

「…ラル、僕もうダメだ！」
ケインは諦めたような声を出した。
「諦めるな…諦めたとき全てが終わる。って寝るな！」
ケインはカウンターで突っ伏して居た。今、2人はそれぞれの初クエストの報告書を書いている。ラルゴの方も進んでいないみたいだ。ギルドクエストは報告書を提出しなければならない決まりである。なんとか気を取り直して続ける。
「夜にスキンヘッド猪を2匹退治っと。その翌日森でオーガが1匹現れたが退治っと。」
”遅咲きのすずらん亭”の共有フロアはサララさんやタチアナ師匠、ルーク達で賑やかだ。ときどきサララさんが進行状況をチェックにくる。
「どこまで進んだかしら？」
また来て、サララさんが聞いて来た。
「もう全部で来てるぜ！だから俺もあっちに行くぜ！」
ラルゴがさりげなく裏返しにして提出して逃げようとしたが捕まりチェックが入る。
「再提出！コレじゃ依頼人が退治したことになるじゃない♪」
「え～、でも～そういう依頼だし…」
サララさんはハウスの仲間がいかにも活躍した風に書かないととか、アピールが足りないとか、沢山の注意してみんなのところに戻っていった。
「ふえ～。なあケイン！そっちはよかったよな両手に花で。コッチは男ばっかだし。」
多分言われると思った事を言われて苦笑する。
「まあな、サララさんは頼りになるし、師匠は格好はともかく知識が豊富だし。」

「俺はタチアナさん、アルパカの制服似合ってると思うぜ！」
「そりゃあれだけの美人だし、何を着ても似合うよ。」
「でも、残念だよな～。帰っちゃうなんて。」
そう、タチアナ師匠は今回の件で王都に一時帰還することになった。アニマルチェンジのアビリティの持ち主が”禁忌”に触れモンスターの姿になった者は2度もとの姿に戻れないというのが今までの定説だった様で、それを師匠は覆したかたちになる。暫くは紋様術師達はそのことで騒がしくなるだろうと師匠は言っていた。そしてもう1度足場を固め治して、王都で研究生活に復帰できる様にすると…。帰り道、そう言って遥か遠く王都を見つめていた師匠の目はキラキラしていた。ケインも師匠は冒険者より紋様術研究の方が似合うと思う。
（本当に紋様、好きなんだろうな。あんな風に何かに打ち込める人はどれだけいるのかな。）
少し考えることに夢中になって手が止まっていることに気付き再開しようとして、ふと気になったことをラルゴに聞いてみた。
「ラル、今いいか？、僕たちのアビリティのことなんだけどな…」
「2つかもってこと、っだろ？」
「ああ。今回の件でアビリティのこと、タチアナ師匠みたいな専門家に相談した方がいいと思ったんだ。」
「ていうか、タチアナさん知ってたぜ。」
「えっ！」
「俺、王都を出る前に一度タチアナさんにあったじゃん？その時にね。」
「なんで黙ってたんだよ。」
ラルゴは少しばつが悪そうに、
「…そうしろって。なんか、理由は教えてくれなかった。」
ケインはタチアナの方を見た。視線が合ったせいかこちらに来る。
「私へのことでも話題にしていたのか？」
お酒を飲んでいたのだろうか？頬が赤い。

「僕、アビリティが2つあるかもしれないんです。師匠は知っていたんですか。」
師匠は一瞬ラルゴに視線を送ってから、
「話したのか…。”禁忌”が気になって相談する気にでもなったか？」
「はい、でもなぜそれを僕にいわなかったんですか？」
「いうことを禁じられていたのだ。そのことについては詳しくは話せんが…。だが、ちょうどいい。話せることを話しておこう。」
師匠もカウンター席に座った。
「お前達のアビリティは紋様術師達の研究心を刺激しているのだ。これから、フーバー老師の門下でラルゴが、リシェル老師の門下でケインが研究される。ちなみに私をリシェル老師が拾ってくれたのはそれも関係する、一番よく知っている立場だったからな。」
2人の反応を確認するかのように間を置いてから、
「そんなに心配するな。とって食われるわけではないぞ。”禁忌”があるかどうかも調査してくれるだろう。お前達は今までどおりしていれば良いのだ。」
「僕たちのアビリティかどんなものなのか、師匠は知っているんですか？」
「わからん…紋様術師としては悔しいの一言だ。」
それでも、ケインは心が軽くなるのを感じた。研究対象にされることはいい気がしない、だが自分達だけの秘密にするのはすでに辛くなっていたから。
「もう今日は気にするな…それよりここが間違っている！」
師匠はケインの報告書をみていった。
「…現在最高の天才美女と書かなければ…表現力が稚拙だな。」
（これは、場を和ませる為の師匠の気配りだよな…たぶん。）
「なんにしても、ラル、早く終わらせようぜ。向こうの、初クエスト祝勝会が終わってしまう。」
「…主役を外して盛り上がってるんだからこのハウス、おかしくな

い？」
「ここ楽しいと思うよ。」
ケインはアビリティを持ったことで、随分賑やかな人生になってきたなと思った。
自分にとってそれは良いことなのだと…。

両手に花で初クエスト（６）（後書き）

夜中に目が覚めてしまい、アクセスを確認したらアクセス数が多くて、嬉しくなって書いてしまいました…眠…ｚｚｚ。

ラルゴの初クエスト（1）

少し時間は遡ってラルゴの話です。

宿のそばの公園でベンチに静かに座り鳥を見る。ラルゴは今、アビリティの特訓をしていた。

今回のクエストは、ラルゴのアビリティの訓練を兼ねての軽めのものだという。ただ、ルーク師匠はクエスト内容は必要になってから伝えると言って説明をしてくれなかった。もう一人の同行者、ドワーフのドゥンガさんも教えてくれなかった、暫くすればわかると言って。

（ともかく集中！）

特訓の内容は鳥の観察だ、鳥になって空を飛べるようになると色々と便利だということでアニマルチェンジの新しい変身対象は鳥に決まった。近くの地面にいる雀を見る、枝に止まった鳩を見る、空を飛ぶカラスを見る。

降りてきたカラスが枝に留まったら、嫌がって鳩が逃げていった。カラスが小首をかしげて飛んで行った鳩の方をみていた。

（女の子に逃げられたケインみたいだ。）

村にいた頃、よくあった光景だ。ケインは女の子をいじめることはなかったが嫌われていた。いや、本当に嫌っていたのではなく眼つきが鋭いので見つめられるとコワイからという程度なのだが。

そんな風に修行をしていると、ドゥンガさんがやってきた。

「修行中悪いが来てくれぬか。依頼人が到着したので挨拶に行く。」

（さあ、いっちょ気合いれますか！留守番のケインには悪いけど。）

気合の入りまくりのラルゴはドゥンガのあとをついていった…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6066x/

冒険者の心得その1生きるべし！

2011年10月26日08時16分発行